



29

「素」

冷たいそうめんを嬉々としてすすっている。

カレンダーを九月にめくると、気持ちの上ではすっかり秋になるものだ。夏とは八月にさよならをして、例年ならもう「そうめん納め」を済ませている頃だろう。あるいは食べたとしても、余ったそうめんを「仕方なく」食べているはずだ。

けれど今年はちょっと違う。残暑のせいか、そうめんを前にいまだ新鮮な気持ちで箸を伸ばしている自分がいる。氷で冷やした白い麺が、まだまだ堂々と食卓の主役を張っている。

正直なところ、僕にとってそうめんは、言ってしまうば「もらいもの」という感じだ。親戚からのお中元やおすそ分けでストックされるもので、これまでわざわざ自分で買うことなどなかった。ところが今年はなんと、この手で買いい足してしまったのだ。余って仕方がないはずのそうめんを、むしろ欲している自分にちょっと驚く。

そうめんを茹でるとき、僕はいつも加減を誤る。茹で時間ではなく量のほうだ。「ちょっと多いかな」「いやいける」などとささやかな自問自答をしつつ鍋に放り込んだ束が、湯の中でみるみるふくらんでいき、ざるに上げる頃にはとんでもない量になっている。こんもりと盛られた白い丘。湯切りにも力が入る。さすがにこの量は厳しいかもと

思うが、案外ぺろりと平らげてしまうのだから不思議だ。六束いってしまったこともある。いくらなんでもそれは食べ過ぎだが、いつもちよっと多めに茹でてしまうのは、そうめんのあっさりとした顔について油断してしまうからかもしれない。

めんつゆの濃さを気分で調整したり、生姜や大葉を足したりして変化をつけながら、今年はもうすこしそうめんと付き合ってみようと思う。用意する立場で言うとなんていい……そんなふうに自分に言い聞かせつつ、食卓の上の夏をまだ居座らせている。